

遠藤 徹

石川達夫『プラハのバロック 受難と復活のドラマ』（みすず書房、2015年）



16世紀末イタリアで生まれたバロック美術には、カトリックによる対抗宗教改革の、いわばプロパガンダの道具という側面がある。プラハのシンボル、カレル橋の袂にそびえる巨大な建造物クレメンティヌムもまた、イエズス会およびその属するカトリック側の勝利を堂々と喧伝するかのような趣がある。そんなクレメンティヌムから旧市街広場側に一本隔てた通りと、カレル橋と旧市街広場を結ぶ通称「王の道」が交錯する一角の建物に、苦痛に悶えながら頭上の重みを一身に背負う四人の巨人が刻み込まれている。プラハ・バロックを代表する彫刻家マティアーシュ・ベルナルト・ブラウンによるアトラス（柱としての機能を兼ねる彫刻）だ。ギリシャ神話によれば、その建築用語の語源となった巨人アトラスはオリンポスの神々に敗れ、罰として天空を支える役を課せられたという。柱として建物に埋め込まれ、肩に背負った重みに身を振らせ耐え忍ぶアトラスの姿は、まさに敗者そのものである。

15世紀フス派の成立以降プラハに根を下ろしたプロテスタント勢力は、1610年代当時巻き返しつつあったカトリック勢力の暴挙に対抗し、1618年プラハ城の窓からカトリック系の役人を突き落とした（第二のプラハ窓外放擲事件）。後に三十年戦争と呼ばれる大宗教戦争の始まりである。先手を取った形となったボヘミアのプロテスタント勢力は、しかしながらその二年後の1620年、プラハ郊外のビーラー・ホラ（白山）の戦いで致命的な敗北を喫する。以降プラハを中心とするボヘミアでは、ハプスブルク家やイエズス会の指揮のもと再カトリック化が進められ、プロテスタント側に立った多くの貴族、市民は「敗者」のスティグマを押されることとなる。

一方で当時のチェコ人にもカトリックを信仰する住民がいたわけだが、彼らにとっても三十年戦争がもたらした影響は手放して喜べるものでは到底なかった。戦場となった祖国は荒廃し、プロテスタント系の親戚や友人が亡命、弾圧される様を間近で目にせざるを得なかった。さらに国外への亡命者と入れ替わりにドイツ人を中心とするカトリック系外国人が流入すると、それに伴い公用語、文語としてのチェコ語の地位は低下、支配者ハプスブルク家によって歴史あるチェコ王国の主権は制限されてしまう。

このような歴史的背景を踏まえれば、チェコにおいてバロック美術が外国からの押し付け、暗黒時代

の象徴として長らく否定的な評価を受けてきたのも頷ける。しかし一方で現在のプラハの街並みが、ゴシックと並び、バロックのそれであることは紛れも無い事実である。上述のクレメンティヌムはもとより、観光客でごった返す旧市街広場やプラハ城の周りにはバロック様式で建造、改築された教会や宮殿が立ち並んでおり、カレル橋（橋



ブラウン作「アトラス」クラム＝ガラス宮殿。
撮影、遠藤 徹

自体の様式はゴシックであるが)の上に並ぶ三十体の聖人像の多くもバロック期に設置されたものだ。

本書においてチェコのバロックが「敗者のバロック」と呼称されるのは上記のような理由によるが、筆者の分析は単なる歴史的事実の整理にとどまらない。バロックという言葉の範疇を造形様式のみならずその時代精神にまで拡張し、カトリック側からいわば押し付けられたバロックが、いかにしてプラハ及びチェコにおいて「敗者のバロック」としての独自性を持つに至ったのか、敗者、受難、越境などをキーワードにチェコ本国の最新の研究を踏まえながら明らかにされる。

とりわけ筆者の分析に熱が入るのが、イタリア・バロックを代表する彫刻家ベルニーニの「聖テレジアの法悦」と、上述したアトラスの作者でもあるブラウンの「聖ルトガルティスの幻」との比較だ。ベルニーニの造形する聖女は、天から降り注ぐ黄金の光を全身に浴びながら我を忘れて恍惚にひたる。その姿勢はあくまでも神の恩寵を一方的に享受する忘我的、受動的なものだ。一方ブラウンの聖女には、大げさに身を振らせるいかにもバロック的な動性を引き継ぎながらも、我を忘れて恍惚にひたるのではなく、しっかりと目の前のキリストを見つめる内省的で醒めた意識が残っている。筆者は言う、チェコのバロックにあるのは「忘我と責任の真空状態ではなく、記憶と責任の重み」であると。外国からもたらされたバロックは、プラハに息づくゴシックやプロテスタントの伝統・気質に触れることにより、もはや借り物ではないプラハ・バロックという独特なものに変容した。そしてそれはプラハという街の受難を象徴するとともに、カタストロフからの復興をも意味する。カラヴァッジョの絵画を引き合いに筆者が語るように、チェコのバロック時代は深い闇と強い光の交錯が織りなす複雑で屈折した時代だったのである。

ところで冒頭で言及したブラウンによるアトラスが顔を向ける通り―「フス通り」の名がつけられている―を南に百メートルほど下りヴルタヴァ川方面に曲がったところに、ベトレヘム礼拝堂がある。現存する建物は1950年代に建てなおされたものだが、実はこの礼拝堂こそ、宗教改革の先駆者ヤン・フスがチェコ語で説教を行っていた場所である。神聖ローマ帝国の都として繁栄を誇った14世紀にゴシック様式で建造されたプラハのシンボル、カレル橋。その橋塔に向き合うようにしてそびえるバロック様式のクレメンティヌム。その巨大な建造物のほぼ真後ろで、苦痛に顔を歪め肩に重みを背負う「敗者」アトラス。その通り¹の先には偉大な宗教者、学者として現在でも尊敬されるヤン・フスゆかりの礼拝堂。この街に蓄積された歴史の複雑さを感じずにはいられない。

ゴシック、バロックを始めとする様々な建築様式が混在するプラハの街並みは、美しいと同時に、ちぐはぐな印象を受けることがある。しかし例えば、レトナー公園やペトシーンの丘など高台から街を見下ろしてみると、不思議にもその街並みが、社会主義時代の悪名高い建築物も含め、不思議な一体感を持って目の前に立ち現れることに驚かされる。本書でも度々言及される美術史家ヴェルフリンは、バロック美術の特徴をクラシック様式のような分節化された美ではなく、個々の部分としては独立できない絶対的な統一に求めた。その意味においてもプラハはまさにバロック的な街であり、さらに言えば、街全体が受難と復活を象徴する一つの芸術作品なのかもしれない。

注

1. ちなみにこの通りの一角に「U Zlatého tygla (黄金の虎)」というホスポダ(居酒屋)がある。20世紀のチェコを代表する作家ボフミル・フラバルはこの店の常連だった。